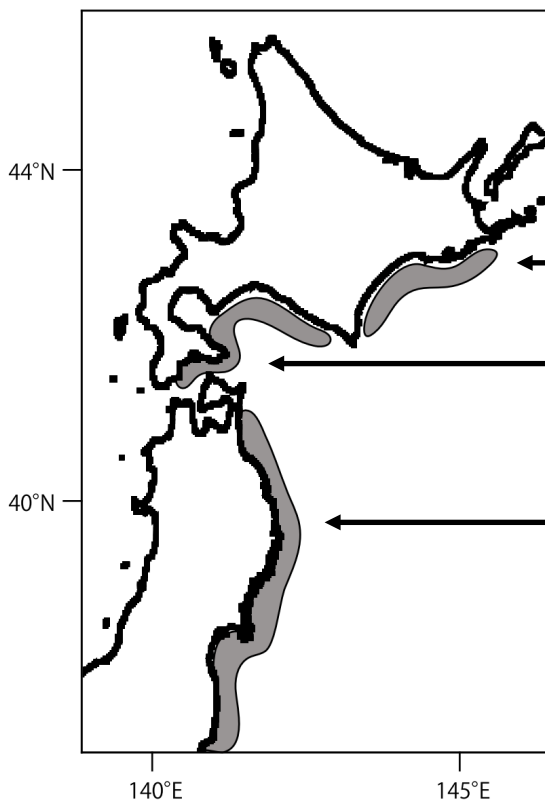




2022年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2022年8月~9月)のポイント



常磐～三陸海域および津軽海峡～道南太平洋海域の
スルメイカの来遊量は前年並、道東太平洋海域では
前年を下回る。

道東太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年より小さい。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年並。
魚体は前年並。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年並。
魚体は前年より小さい。

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
担当：企画調整部門（横浜） 上原
浮魚資源部（横浜） 大島、岡本
電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001
当資料のホームページ掲載先URL
<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

2022年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2022年8月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：冬季発生系群（2022年級群）

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より小さい。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：来遊時期は前年より遅い。また、漁場形成は散発的で、明瞭な主漁期は無い。
- (3) 魚体：前年より小さい。

I 予報の説明

2022年5月下旬～7月上旬に実施した太平洋及び日本海のスルメイカ漁場一斉調査と日本海スルメイカ北上期調査¹⁾の結果(図1～3;以降、上記調査をいか釣り調査と総称する)、および5～7月までの漁況経過(表1)を主要な情報として8月～9月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、常磐～三陸海域および津軽海峡～道南太平洋海域では前年並、道東太平洋海域では前年を下回ると予測される。なお、前年8月～9月の漁獲量は、常磐～三陸海域では近年5年(2017年～2021年)平均を下回り、津軽海峡～道南太平洋海域では近年5年平均並、道東太平洋海域では近年5年平均を下回っていた。

¹⁾ 北海道立総合研究機構函館水産試験場が独自に実施。

1. 常磐～三陸海域(いか釣り、底びき網、定置網、まき網)

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れを主体に、津軽海峡を通過して来遊する日本海由来の群れが一部含まれると考えられる。三陸周辺海域(41°N以南、143°E以西)におけるいか釣り調査でのCPUE(いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数)は前年を下回った。一方、各地域における6月(一部7月上旬²⁾)までの漁法別の水揚量や小型いか釣り漁船CPUE(1日1隻当たり漁獲量)は、前年を上回っていた場合が多かった。以上のことから、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年並と予測される。6月中旬～7月上旬に日本海の津軽海峡西口周辺海域(39°N～42°N、138°E～140°E)で実施されたいか釣り調査でのCPUEは前年に引き続き非常に低い水準で推移したため、日本海由来の来遊量は前年並に低い水準になると予測される。以上の調査結果、およびこれまでの漁況の経過から、常磐～三陸海域への来遊量は前年並と予測される(前年の漁獲量は近年5年平均を下回った)。

魚体サイズは、宮城県と岩手県における6月の水揚物の測定結果から(図4)、前年より小さい個体が主体になると考えられる。

²⁾ 漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報を基に集計。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域(いか釣り、定置網)

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れと津軽海峡を通過して来遊する日本海由来の群れが含まれると考えられる。津軽海峡東口周辺海域(41°N以北、143°E以西)におけるいか釣り調査CPUEは前年を上回ったが、有漁点は前年同様に全7調査点中1点のみであった。6月および7月上旬に函館港と大畑港に水揚げした小型いか釣り漁船CPUEはそれぞれ前年を上回った。一方、「1.常磐～三陸海域」で記述した通り、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量、および日本海由来の来遊量は前年並と予測される。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年並と予測される(前年の漁獲量は近年5年平均並)。

魚体サイズは、当該海域周辺における6月～7月上旬の入尾数別水揚情報から²⁾、前年並の魚体サイズの個体が主体になると考えられる。

3. 道東太平洋海域(いか釣り、底びき網)

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合域を北上する群れと考えられる。沖合域(143°E以东)におけるいか釣り調査CPUEは前年並であったが、有漁点割合は前年を下回った。また、親潮の第1分枝の張り出しは極めて南偏で推移し³⁾(昨年は前年並～かなり北偏で推移)、道東沿岸域の水温は前年より低くなると予測されている(図5、水産研究・教育機構の海況予測システムFRA-ROMSII⁴⁾)。このことから、前年より道東沿岸域への回遊は遅くなると考えられる。以上のことから、道東太平洋へのスルメイカの来遊量は前年を下回ると予測される(前年の漁獲量は近年5年平均を上回った)。調査CPUEは過去の推移の中でも低い水準にあり、漁場形成は散発的で、明瞭な主漁期はないと予測される。

魚体サイズは、沖合域でのいか釣り調査結果から、前年より小さい個体が主体になると考えられる。

- 3) 2022年度第2回東北海区海況予報 (<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2022/20220620/>)。
- 4) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構により開発され、2022年3月より運用を開始した海況予測システム。

II 調査結果

1. 太平洋第1次スルメイカ漁場一斉調査

5月下旬～6月下旬に太平洋で実施されたいか釣り調査の結果、調査海域全体の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.02尾であり、前年並であった（0.02尾、前年比80%）（図1、2）。海域別にみると、三陸周辺海域では0.01尾であり、前年を下回った（0.05尾、前年比25%）。津軽海峡～道南太平洋海域では前年同様に全7調査点のうち有漁点は1点のみであったが、平均CPUEは0.02尾であり、前年を上回った（0.01尾、前年比361%）。沖合域では0.02尾であり、前年並であったが（0.01尾、前年比117%）、有漁点割合は前年を下回った（本年9%、前年20%）。以上のように各海域において年変動はあるものの、極めて低い水準で推移していた。

漁獲物の外套背長組成を海域別に見ると、沖合域では前年同様に13cmに最頻値があったが、組成としては前年より小型の個体が多かった（図3）。三陸周辺海域、および津軽海峡～道南太平洋海域では漁獲尾数が少ないため比較できない。

2. 日本海スルメイカ漁場一斉調査（2022年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報の結果より引用・改編）

6月中旬～7月上旬に津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）で実施されたいか釣り調査の結果、平均CPUEは0.16尾であり、前年（0.03尾）を上回った。ただし、2019年以降現在にかけての平均CPUEは、それ以前と比較して非常に低い水準で推移していた（例えば、2010年～2018年平均は11.17であったのに対し、2019年～2022年平均は0.87）。外套背長組成は最頻値18cmの単峰型で、前年（10cm以下が主体）より大型であった。

3. 移行域幼稚魚調査（参考情報として掲載）

5月上旬～6月上旬に常磐～三陸沖の太平洋で実施された表層トロールネットによる調査の結果、外套背長10cm未満のスルメイカの平均CPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）は2.7尾で、前年（5.6尾）を下回った（図6）。また、全調査点のうち有漁点の割合は38%であり、前年（59%）を下回った。漁獲物の外套背長組成は1～4cmの割合が高く、前年より小型の割合が高い傾向にあった（図7）。本調査で採集された群れは、本予報期間後半に漁場へ来遊する可能性があるが、CPUEは前年を下回っており（前年比48%）、漁場への来遊の寄与としては大きくないと考えられる。

III 各海域の漁況経過

2007年～2015年の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量¹⁾は7万～16万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2021年は1.2万トンであった（図8）。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域および道東太平洋海域に区分される。太平洋海域での2021年8月～9月の漁獲量（生鮮）は4.2千トンであり、そのうち常磐～三陸海域では2.6千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では1.2千トン、道東太平洋海域では0.4千トンであった（図9）。近年5年（2017年～2021年）平均比は、常磐～三陸海域では48%、津軽海峡～道南太平洋海域では98%、道東太平洋海域では226%であった。なお、根室海峡～オホーツク海と千葉県以南の海域の漁獲量はそれぞれ0.6千トンと17トンであった。

2022年5月～6月の太平洋沿岸主要港での水揚量²⁾（生鮮：速報値、一部未集計）は279トンで、前年（165ト

ン)を上回った。常磐～三陸海域の主要港では221トンで、前年(107トン)を上回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港では18トンで、前年(22トン)並であった。千葉県以南では40トンで、前年(36トン)並であった。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

- 1) 主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の値で引き延ばしているため、図8、図9を含めた漁獲量は全て推定値である。
- 2) 水揚量は単純積み上げた数値。

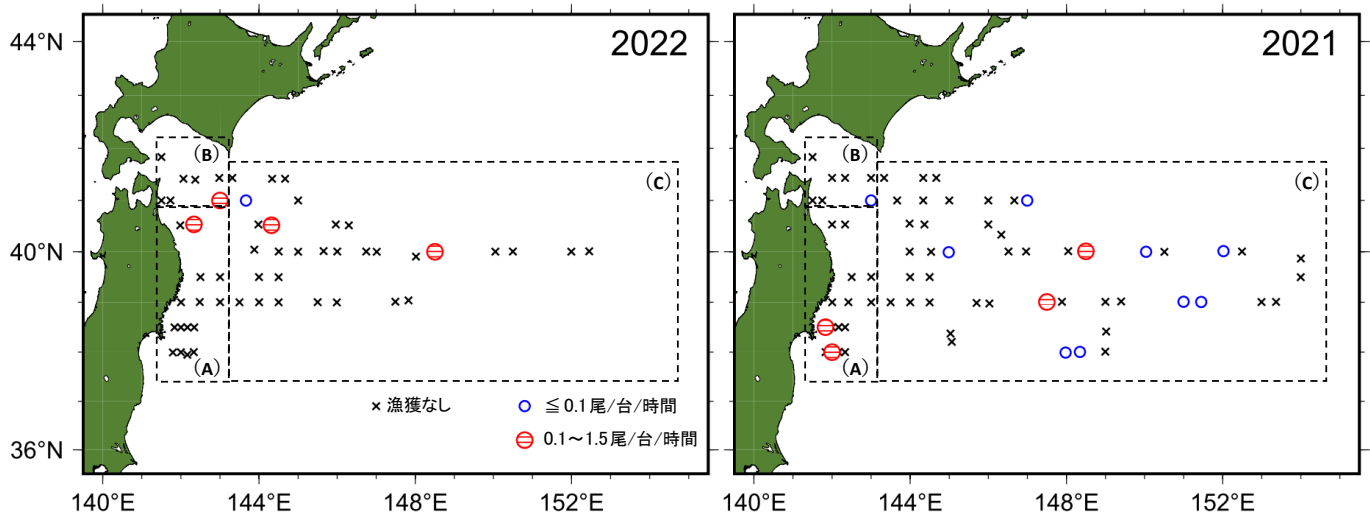


図1. 2021年、2022年5月下旬～6月下旬の太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布
 ⊖は0.1～1.5尾/台/時間、○は0.1尾/台/時間以下の有漁点、×は漁獲無しを表す。破線で囲まれた海域は（A）三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）沖合域を示す

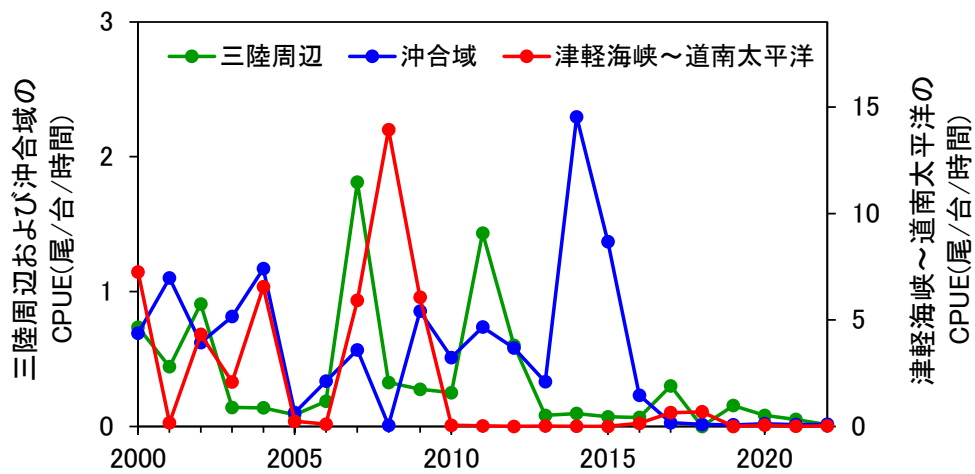


図2. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移

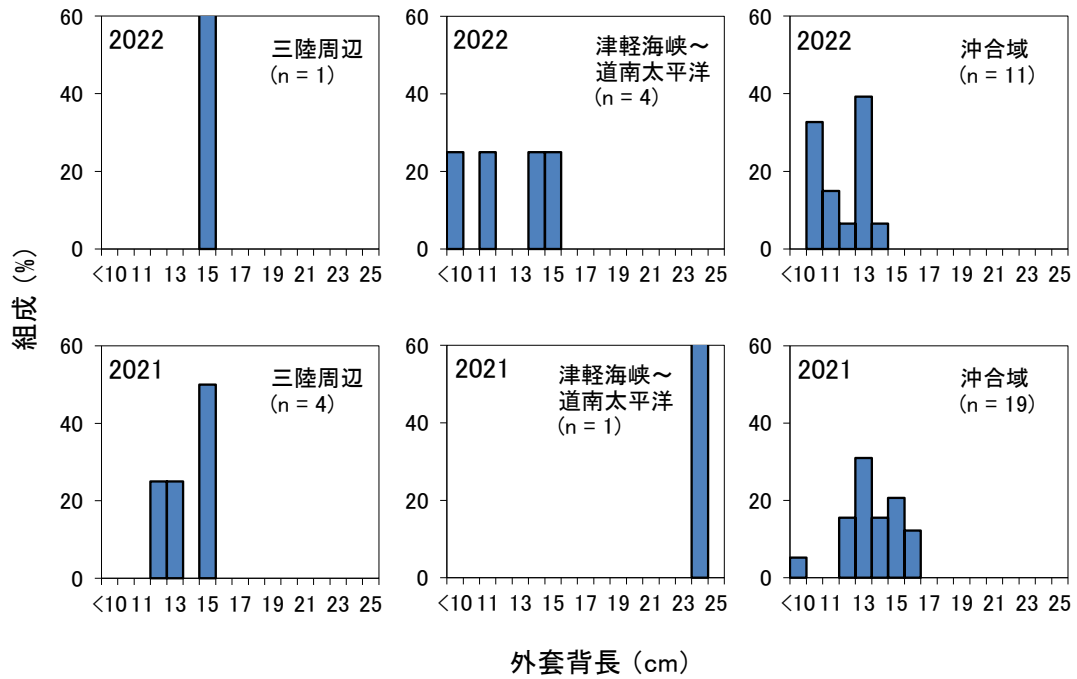


図3. 太平洋におけるいか釣り調査（三陸周辺海域・津軽海峡～道南太平洋海域・沖合域）で採集されたスルメイカの外套背長組成
各調査点の組成をCPUEで重み付け平均した後に全体の組成を作成している
nは測定尾数を示す

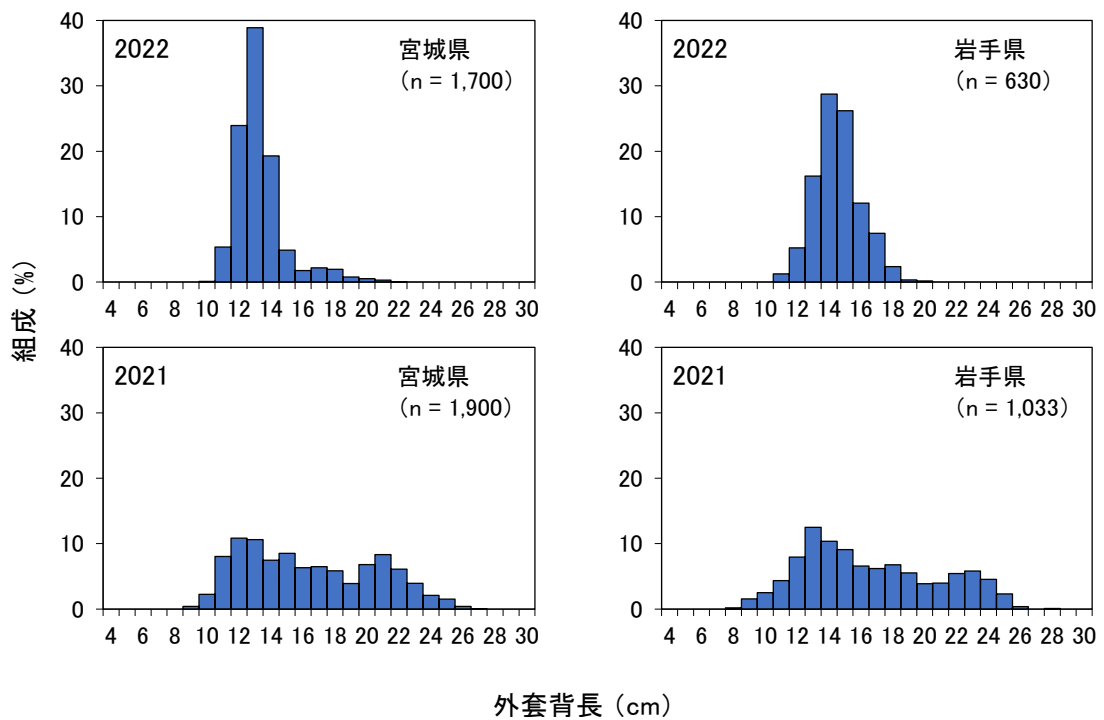


図4. 2021年、2022年の6月に宮城県（底びき網）と岩手県（定置網）で水揚げされたスルメイカの外套背長組成

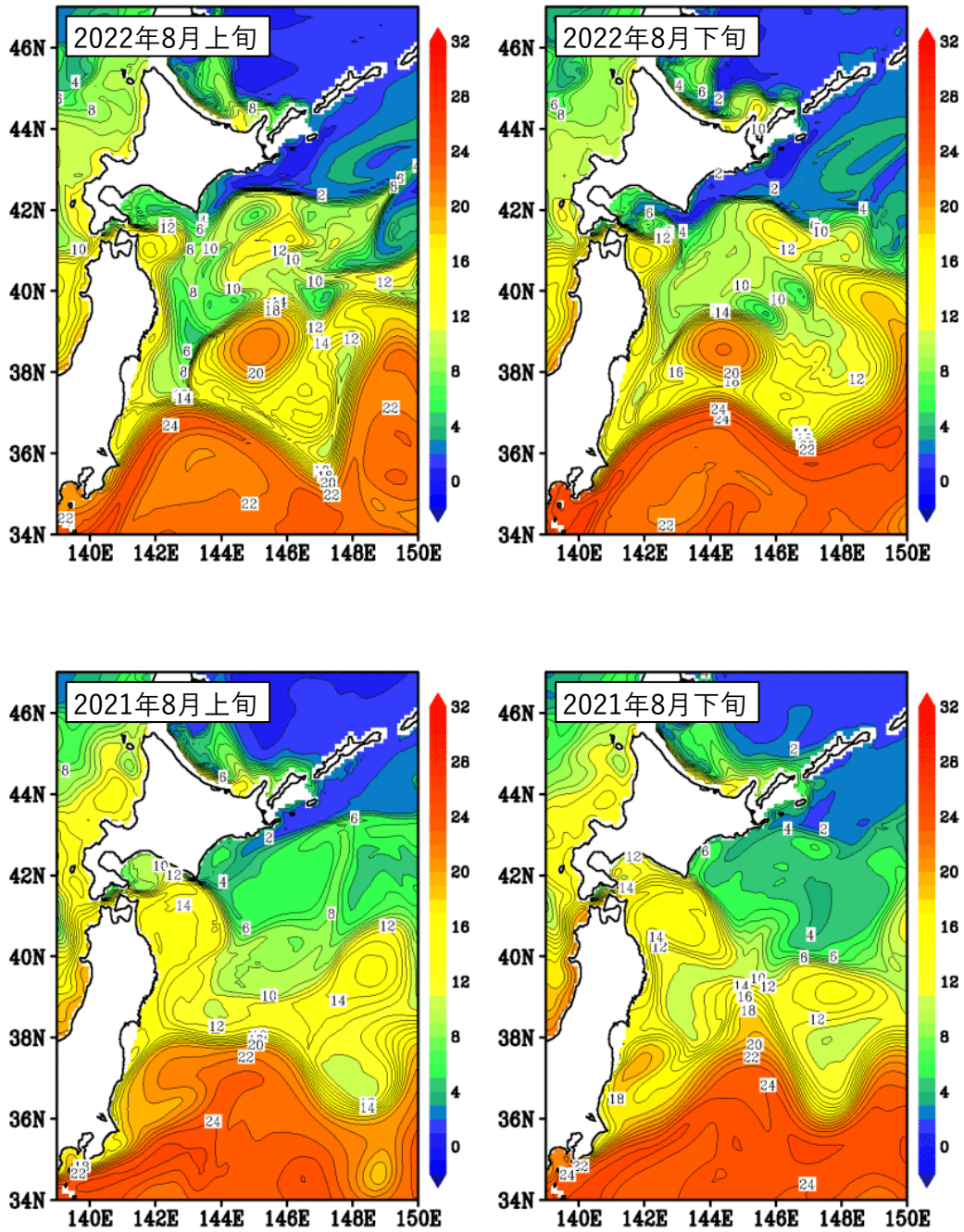


図5. 海況予測システムFRA-ROMSIIによる2021年、2022年の8月上旬と下旬の深度50mにおける水温（2022年は予測水温）
 深度50mはスルメイカの代表的な分布深度

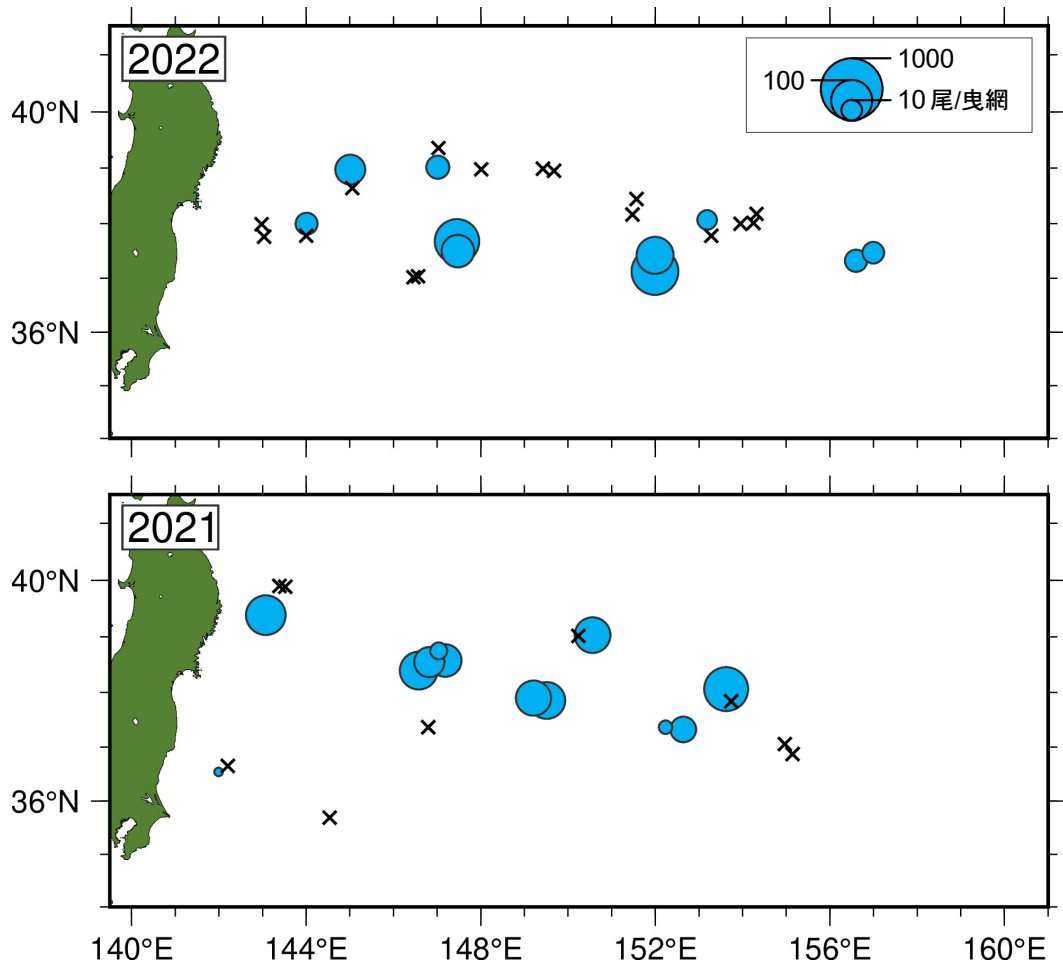


図6. 2021年、2022年5月上旬～6月上旬の太平洋における表層トロールネット移行域幼稚魚調査によるスルメイカのCPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）の分布
×は漁獲が無かった点を示す

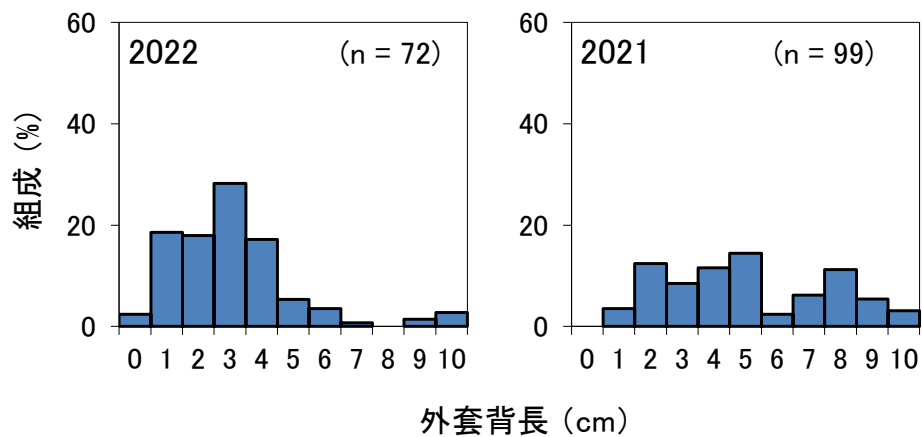


図7. 2021年、2022年5月上旬～6月上旬の太平洋における表層トロールネット移行域幼稚魚調査で採集されたスルメイカの外套背長組成

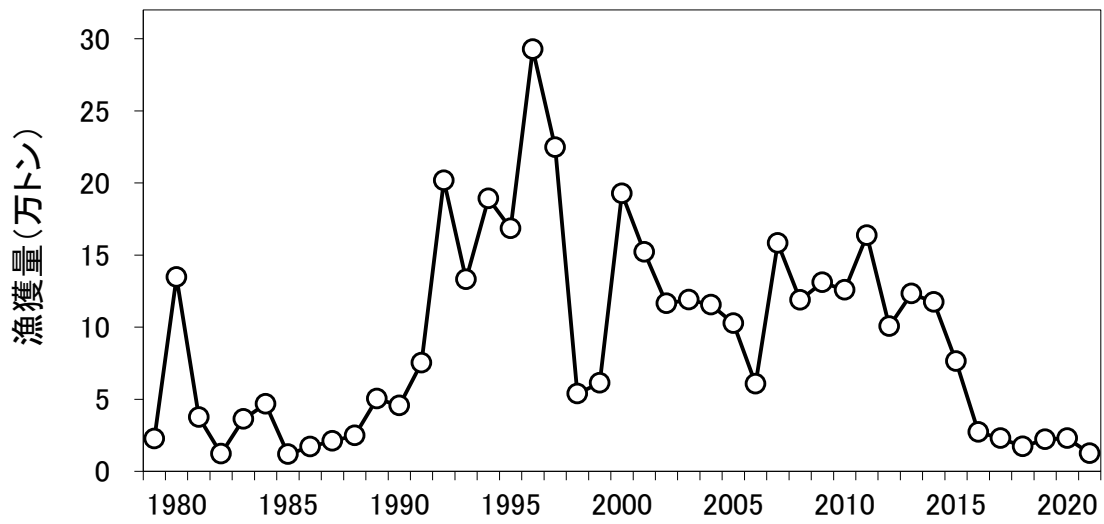


図8. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの漁獲量（全漁業の暦年集計）の年推移

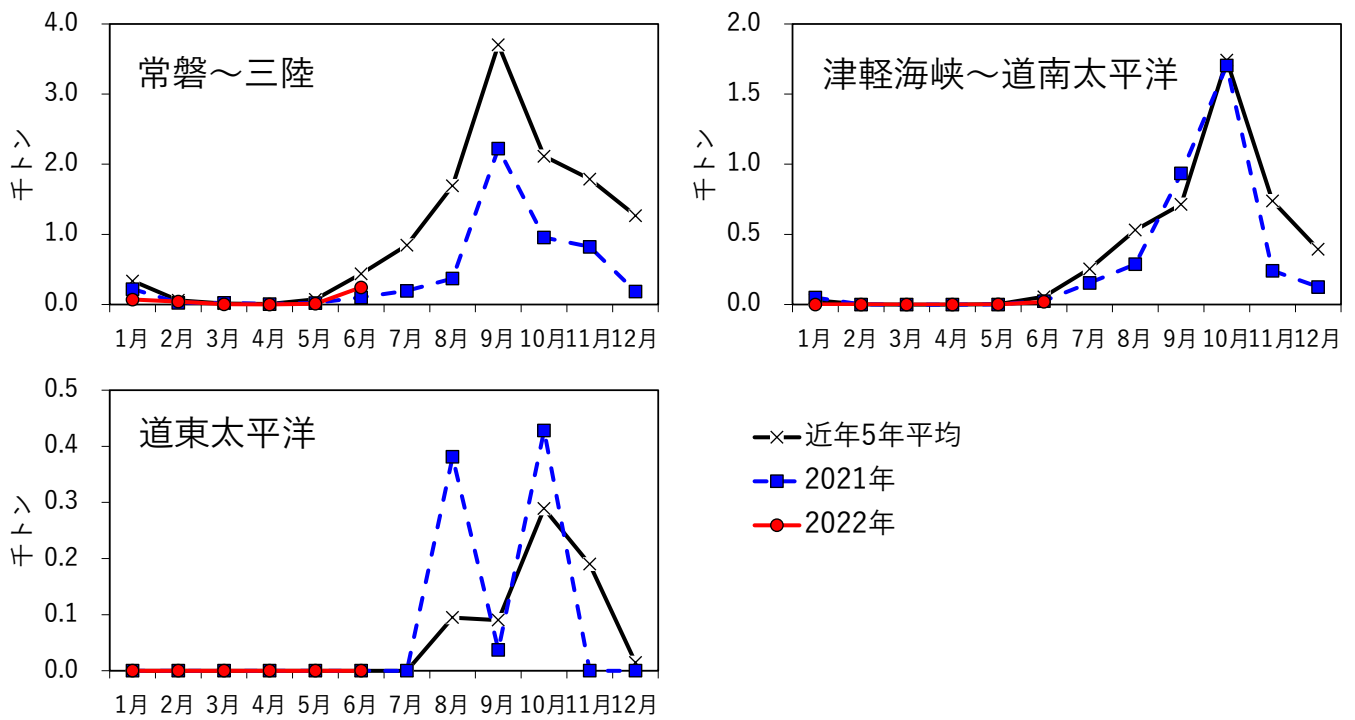


図9. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）
 近年5年平均は2017年～2021年の平均
 （釣り・定置網・底びき網・まき網）

表1. 漁況経過（2022年5月～7月、一部未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	7月26日の時点で初水揚げはまだない（前年は7月19日に根室の定置網で初水揚げがあった。また、8月4日に花咲で釣りによる初水揚げがあった）。
北海道 道南	6月の函館港への釣りによる水揚量は12トンであった（前年は13トン）。CPUEは前年比124%であった。また、漁業情報サービスセンターのスルメイカ漁況・市況情報によると、7月上旬の水揚量は15トンであった（前年は1トン）。
青森	6月の白糠港への釣りによる水揚量は16トン（前年は1トン）、CPUEは前年比539%であった。 6月の大畑港への釣りによる水揚量は520 kgであった（前年は水揚無し）。 6月の八戸港への釣りによる水揚げは前年同様無く、底びき網による水揚量は67トンであった（前年は20トン）。
岩手	6月の主要7港への釣りによる水揚げは無かった（前年は1.8トン）。底びき網による水揚量は204 kg（前年は151 kg）、定置網による水揚量は30トンだった（前年は17トン）。また、漁業情報サービスセンターのスルメイカ漁況・市況情報によると、7月上旬の定置網の漁獲量は8トンであった（前年は6トン）。
宮城	6月の主要10港への底びき網による水揚量は74トンであった（前年は23トン）。定置網による水揚量は13トンであった（前年は20トン）。釣りによる水揚量は5 kgであった（前年は25 kg）。また、漁業情報サービスセンターのスルメイカ漁況・市況情報によると、7月上旬の石巻港への底びき網による水揚量は14トンであった（前年は0.3トン）。
福島	5月～6月の主要4港への沖合底びき網による水揚量は13トン（前年は4トン）、小型底びき網による水揚量は1.4トンであった（前年は0.6トン）。
茨城	5月～6月の主要4港への沖合底びき網による水揚量は1.5トン（前年は1.3トン）、小型底びき網による水揚量は416 kgであった（前年は946 kg）。
千葉	5月～6月の主要3港への定置網による水揚量は2.1トン（前年は3.2トン）、釣りによる水揚げは無かった（前年も無し）。
神奈川	5月～6月の主要2港への定置網による水揚量は78 kgであった（前年は291 kg）。6月の間口港への釣りによる水揚量は73 kg（前年は368 kg）、CPUEは前年比27%であった。
静岡	6月の仁科浜港への釣りによる水揚量は31 kgであった（前年は141 kg）。CPUEは前年比62%であった。
三重	5月～6月の奈屋浦港への中型まき網による水揚量は24トン（前年は2トン）、主要2港への定置網による水揚量は267 kgであった（前年は767 kg）。
和歌山	6月のすさみ港への釣りによる水揚量は6 kgであった（前年は4トン）。
高知	5月～6月の主要3港への釣りによる水揚げは無かった（前年も無し）。

注：CPUEは1日1隻当たりの漁獲量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	静岡県水産・海洋技術研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	三重県水産研究所
岩手県水産技術センター	和歌山県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	高知県水産試験場
福島県水産資源研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
茨城県水産試験場	(取りまとめ機関)
千葉県水産総合研究センター	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
神奈川県水産技術センター	